研究所通信

□　発行責任者　NPO法人長崎人権研究所　藤澤　秀雄
□　住　　所　長崎市上銭座町２－７

「戦後」にまつわること
―通信の再刊にあたって―

理事長　藤澤　秀雄

「通信」の再刊にあたってまず頭に浮かんだことは、40年前に部落問題の早期解決に向けて私に何ができるかという観点からまず長崎大学教養部で「解放講座」の開設に取り組んだ頃の想い出です。これは書き出すと長くなるので次回以降の連載として、今回は「被爆70年」とか「戦後70年」という標語をよく目にする最近の状況を踏まえて、時節柄「戦後」という言葉に関する想い出から始めたい。

今から70年前当時国民学校初等科6年生であった私が、長崎に原爆が落とされたのを知ったのは翌日の登校中のことでした。誰が言ったのか記憶は定かではないものの、「昨日長崎に原爆（当時は新しい爆弾という認識）が投下された」という話をすると、皆が一斉に「次はどこがやられるのだろう」という話になり、各自勝手に次々と大きな都市名を言いだし、とどのつまりは「博多には落とさないだろう」ということで終わった。「次は」というのには3日前、広島に原爆が投下されたことを皆が知っていたからです。大都市に次々と大量の焼夷弾が落とされて焼け野原になってしまったことを知っており、それが「これからは一発の爆弾で焼け野原になる」時代に突入したのだというのがみんなの受け止め方だったと思います。

ところで、当時の新聞では報道が規制されテレビはもちろん電話すら各家庭にはなかった時代に、どのようにして広島や長崎に原爆が投下されたという情報を入手できたのでしょうか。登校途上の周りは田んぼという筑豊の片田舎にあって正確な情報をいち早く知ったのが不思議でならない。

最近、沖縄の新聞社をどうすれば「ツブセルカ」といった議論が一部の国会議員の間で話題になっているようだが、新聞社が居眠りをしていても大事な情報はおのずと伝わるもの。そのことを知らない世代が増えてきつつあることこそが、憂うべきことなのかもしれません。

「被爆70年―浦上町から」の取り組みが始動

第3回実行委（2015.5.8）

戦後70年そして被爆70年を迎えたばかりの1月18日、「『被爆70年―浦上町から』実行委員会」が開催されました。これは、被爆から70年、被爆者の高齢化が進み被爆体験の継承が課題となる中、核兵器の廃絶はおろか世界各地で今なお紛争が絶えない。一方、わが国では集団的自衛権の行使容認の閣議決定やそれを受けた新たな法整備が準備され、「戦争ができる国づくり」が進められている今日、原爆によって一瞬のうちに壊滅した「浦上」の地からこのような流れに抗し、「反戦・反核・反差別」を継承する取り組みを進めていくことを目的に開かれたものです。

そこには、世帯数にして２００あまり１０００人を超える、当時県内で最も大きかった被差別部落の人たちの半数以上が原爆によって亡くなり、生き残った人たちの多くが全国各地に離散していった。そしてこのような厳しい中で、戦後長崎の部落解放運動がどのようにして再建され、取り組みが進められていったのか。被爆後の「浦上」の歴史と重ね合わせながらこのことをあらためて考えていきたいという思いもありました。

実行委員会には部落解放同盟長崎県連合会や部落解放同盟長崎支部をはじめ部落解放長崎地区共闘会議や長崎県人権教育研究協議会、長崎市人権教育研究会、部落解放に取り組む長崎県宗教教団連帯会議、長崎人権研究所の7団体が集まり、今後の具体的な取り組みの検討が始まりました。

議論の中で取り組みの柱として以下の3つが固まりました。一つは人権研究所が進めてきたこれまでの被爆体験、解放運動の記録や映像を整理して1本のＤＶＤにまとめること。二つ目に原爆被爆、部落、キリシタンという「浦上」に重なる課題をテーマに学習講演会を開催すること。三つ目に被爆2世の聞き取りを進め、被爆と部落差別という二重の「重み」を生きてきた経験を解放運動に継承していく、というものでした。

被爆後多くの人々が全国各地に離散していく中、「浦上町」に残った人たちを中心に結成された「長崎郷土親興会」は毎年8月9日に原爆犠牲者追悼法要を行っています。被爆70年を迎える今年は各地から集まった方たちとの交流懇親会が10年ぶりに開催されます。この中で、郷土親興会によるこれまでの追悼法要や被爆体験などの歴史をご覧いただくＤＶＤの作成も進めているところです。

解放運動の歴史や被爆体験など膨大な記録を後世に
2014年ろうきんNPO助成事業で取り組む

長崎県における戦後の部落解放運動の本格的な取り組みは、１９７３年に部落解放同盟長崎県連合会が結成されてから始まります。その後、１９７９年に長崎県部落史研究所（２００４年よりＮＰＯ法人長崎人権研究所）を設立し、今日まで部落差別をなくし人権が尊重される社会の実現にむけた取り組みを進めてきました。

戦後の解放運動の黎明期から今日までの取り組みの中で、多くの被差別当事者が語り残してきた記録（カセットテープ約３００本）や　多数の写真、また人権・同和問題に関する新聞記事などの切り抜きが保存されています。これらの記録をデジタル化（ＣＤやＤＶＤ化）して、年代・内容・人物ごとに体系的かつ総合的に整理しこれからの啓発活動などに活用していくことを趣旨に、当研究所が昨年度の「九州ろうきんＮＰＯ助成事業」に応募して、採択されたものです。

アーカイブ化した記録・資料

デジタル化した主な記録

デジタル化を行った資料は、当研究所や部落解放同盟長崎県連合会などが所蔵する資料のうちカセットテープ、写真、新聞記事切り抜きを中心に進めてきましたが、高岡良雄氏や平山恵昭氏、長崎市人権教育研究会が撮影した映像が多数存在することも明らかになり、これらの映像資料も順次対象としてデジタル化の作業を進めました。

デジタル化したデータは、現在、ハードディスクに保存していますが、データの分類や整理、提供するデータの範囲・形態などについて引き続き検討を進め、部落問題の早期解決と人権社会の確立にむけた今後の取り組みや啓発活動に活用していきたいと考えています。

なお、これまでにデジタル化できなかった多数のプリント写真、ネガフィルム等の画像や８ミリビデオ映像などについては、今年度以降さらに作業を進めていくことにしています。

お知らせ

◆第21回全国部落史研究大会
◎日時　7月25日（土）～26日（日）
◎会場　熊本学園大学高橋守男記念ホール（熊本市中央区大江２の５の１）

◆第34回九州部落解放史研究集会
◎日時　8月1日（土）～2日（日）
◎会場　都城市役所地区公民館　五十市地区公民館（都城市五十町）

＊分科会で当研究所の阿南重幸さんの報告があります。

あとがき

「旧長崎街道を歩く」。長崎を起点に4回目となる大村から東彼杵までの約20キロに先日初めて挑戦。あいにくの雨で「松原宿」までで中断。次回は9月26日の予定で「松原宿」から嬉野までの約20キロを歩く。興味のある方はぜひご参加を（良）。

研究所の入会案内

◇研究所では会員を募集しています。正会員：5000円、賛助会員:3000円、団体賛助会員:10000円で年会費です。

２０１５年５月２９日（金）　長崎新聞

被爆、差別の苦しみ 後世へ
長崎人権研究所など

長崎原爆で住民の半数近くが犠牲になった被差別部落「浦上町（爆心地の南1・2キロ、現・長崎市緑町）」。町の名前が消えた戦後、部落解放運動と被爆体験を語る活動に尽くした人たちの映像、音声を後世に残そうと、NPO法人「長崎人権研究所（藤澤秀雄理事長）」は関係資料のデジタル化を進めている。

「デジタル化した資料は、写真ネガフィルム約1700枚、カセットテープ約400本（423時間分）、ビデオ映像（DVD59枚分、約87時間）、新聞の切り抜き資料（画像ファイル約800点）など。1970年代半ば～2000年代が中心。戦後9年目の54年4月の映像が最も古く、戦前に部落解放運動を率いた故梅本仁四郎氏の胸像と「原爆犠牲者之慰霊塔」の除幕式典（市内の寺院）の様子が撮影されていた。撮影者、機材は不明だが、関係者がビデオの形で保管していた。

同研究所の前身、県部落史研究所は80年から、旧浦上町住民らの被爆体験聞き取りを開始。被爆の悲しみと差別の苦しみを語る住民（故人）の映像、音声が数多く残されていた。池田芳信理事は「現在、修学旅行生らに体験を語る住民は一人。デジタル化によって継承活動の広がりが期待される」と話す。

同研究所と部落解放同盟長崎支部（中村由一支部長）はデジタル化した映像を基に、DVD「被爆70年　浦上町から」（42分）を作成。戦後の部落解放運動の歴史や爆犠牲者慰霊祭の様子、被爆体験を語る住民、子どもたちの継承活動を収めた。

DVDのタイトルと同名の実行委（同支部など7団体）は6月6日午後2時、県教育文化会館（同市筑後町）で講演会を開く。ジャーナリストの馬場周一郎さんが「ナガサキの断層―『浦上』を取材して考えること」と話し、DVDも上映する。入場無料。

「部落解放運動や被爆者の聖霊祭、『記録を残したい』と撮る出まん（左）。デジタル化した映像を収録したDVD「被爆70年―浦上町から」（手前）

部落解放運動の記録 デジタル化

駅前じんけん講座

被爆70年を振り返る

DVD「被爆70年―浦上町から」を作成して

原　久志さん（部落解放同盟長崎支部書記長）

5月30日、当研究所と県人権教育啓発センターの共催で「駅前じんけん講座」を開催、59人の参加がありました。

「被爆70年を振り返る」をテーマに、部落解放同盟長崎支部と長崎人権研究所が作成したDVD「被爆70年―浦上町から」を上映後、部落解放同盟長崎支部書記長の原久志さんが被差別部落の原爆被害の状況や被爆後に県内各地や全国各地に、親戚などを頼って浦上の地を離れていった人たちの歴史などを紹介。原さんは「DVDやこれまでに残された体験の記録などを活用し、次の世代に語り継いでいかなければいけない」と語り、これからの活動を引き続き広げていきたいと強調しました。

参加者からは以下の感想が寄せられました。

原さんの報告（2015.5.30）

■DVDで浦上の歴史と被爆の実態をまとめて学習できて、とても勉強になりました。また、映像の中で懐かしい皆さんと出会うことができて、ともするとなくなりそうになるやる気を奮い立たせることができました。

■差別と被爆体験の継承をどうするか、真剣に取り組まなければならない。そのことを痛切に感じました。

■記録が保存されていることに感動。体験者の語りはやはり胸につまりました。

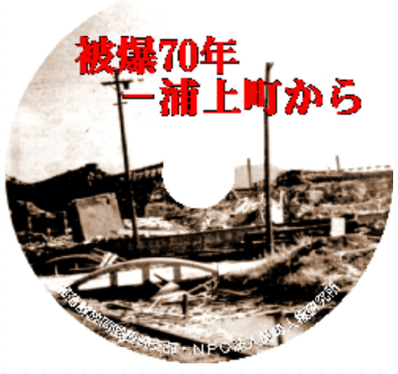
■「平和」が危うくなってしまっている今、戦争が何をもたらすかを具体的に知ることができるテキストとして貴重なDVDだと思います。

■部落差別についての話を初めて聞きました。知らない人はたくさんいると思います。このような機会をたくさんの人に提供できたらよいと思います。

■やはり実際に被爆に会われた方の、命からの声を聞かせていただいたとき、どうにかして今後も多くの人に伝える手立てを講じて、平和、部落差別の解消を推し進めなければ・・・という思いをあらためて持つことができました。

■次の世代に伝えていくことの大切さをあらためて感じることができました。

DVD「被爆７０年 ―浦上町から」



DVD「被爆70年―浦上町から」は、昨年度に当研究所が取り組んだ県内の部落解放運動や関係者の被爆体験の記録などのデジタルアーカイブ事業の成果をもとに制作したものです。

その中には「長崎郷土親興会」による「原爆犠牲者之慰霊塔」除幕式、30回忌追悼法要の映像の一部、50回忌追悼法要の映像の一部、55回忌追悼法要の映像の一部、部落解放同盟長崎県連結成の契機となった「長崎市開港400周年古地図差別事件」など結成当時の取り組みを語る県連初代委員長磯本恒信さんの講演の一部などに加えて、中村容子さん、岩戸静江さん、橋本アキヨさんの被爆体験の一部、現在のいものこ子ども会やウラカミ雑草の会の活動などの映像を中心に収録しています。

なお、このDVDをもとに今年5月26日から27日の2日間にわたって熊本市で開かれた人権社会確立第35回全九州研究集会の分科会で、長崎から「被爆70年―浦上町から」として、取り組みの経過を報告するとともに、上映を行いました。

「人権ブックレット」（4部作）発行など決定!!

―第１２回研究所総会を開催―

5月30日当研究所の第12回総会を開催しました。藤澤理事長の挨拶や県人権・同和対策課古瀬課長の祝辞の後、山下信哉さんを議長に選出。２０１４年度の事業報告・決算・監査報告などの承認受けるとともに、新年度の事業計画・予算などを提案、全体で承認されました。

新年度の新たな事業としてながさき人権ブックレット「こだわって部落問題」４部作の刊行やデジタルアーカイブ事業の成果をもとにしたDVDの制作などを決定。役員では新理事に吉井隆司さん（県人教）が就任。また、当研究所創立以来事務局の運営を担当してきた阿南重幸さんが退任し、石村副理事長・池田理事が担当となりました。

ナガサキの断層

―「浦上」を取材して考えること―

馬場　周一郎さん講演会より

6月6日午後2時から長崎県教育文化会館で、「ナガサキの断層―「浦上」を取材して考えること」をテーマに講演会が開かれました。講師は元西日本新聞長崎総局長でジャーナリストの馬場周一郎さん。主催は、部落解放同盟長崎県連・同支部や長崎人権研究所など7団体で構成する「被爆70年―浦上町から」実行委員会。同実行委員会は、被爆70周年を記念して解放運動の歩みを記録するDVDを作成、講演前に上映されました。

馬場周一郎さんの講演（2015.6.6）

ナガサキの断層

馬場さんは長崎総局時代に原爆をテーマとした取材を行い、本社勤務の2002年には「ナガサキの断層」（上・中・下）を、東京支社時代の2004年には「永井隆からの手紙」（上・中・下）をそれぞれ紙上で連載。講演ではこの二つの連載の取材経験を通して、長崎の原爆被爆には、物質的な被害というだけではなくいくつかの「断層」が横たわっていることを指摘。断層とは、原爆が長崎という中心地ではなく浦上に落とされたこと、その浦上が江戸時代潜伏キリシタンの居住地だったこと、また被差別部落が存在したこと、そして、虚像としての「平和祈念像」。2000年8月カトリックセンターでカトリック正義と平和委員会が、「部落問題との出合い直し」をテーマに開催され、その取材で「そうだ、長崎には断層があるな」と思い至る。原爆は、近代社会におけるカトリックへの差別、被差別部落への差別、差別の結集地としての浦上にさらなるスティグマを刻印したと指摘します。

さらに平和祈念像は、被爆していない虚像だと喝破。製作者の北村西望は取材に対し、奈良の大仏のような「大きな男神像」をつくるべきだと話し、「真の平和は実現するのでしょうか」という記者の問いかけに「ダメ、人間は欲張りだから」と答えたことを紹介し、「被爆地はアトリエなのか」と問いかけます。また、「長崎の鐘」の出版に触れ、永井隆はカトリックの信徒として生き方を貫いたが、「神の摂理」「燔祭」という永井イズムは当時東西の冷戦時代が到来したことで、GHQに利用され出版された。原爆は神の意志だとすれば、それは原爆を正当化することにつながるからである、と指摘。馬場さんは最後に「浦上を平和や人権獲得の発信地に」と締めくくり講演を終えました。

・・・・・・

先の連載「永井隆からの手紙」の一文を紹介しておきます。

「祈りの長崎」。言い古されたこのフレーズがもしもいまだに被爆地長崎を覆い、それが「長崎の鐘」的殉教意識に源流があるとすれば、私たちはこれから何度も源流へと批判的に回帰しなければならない。それは永井を貶めるためではなく、「祈り」を「怒り」へ質的に転嫁させるには何が必要なのかを見つめなおすためである。

（馬場周一郎）

原爆犠牲者追悼法要　今年も8月9日に

郷土親興会懇親会も10年ぶりに開催

昨年（2014.8.9）の追悼法要

爆心地から1・2キロ地点の緑町共同墓地では、8月9日に町内の犠牲者を追悼する「原爆犠牲者追悼法要」が開かれています。これは浦上町出身者でつくる「長崎郷土親興会」が主催。多くの犠牲者が出たこの町では生存者の多くがこの土地を離れ、親戚をたよりに仕事を求めて市内外へと故郷を後にしました。その後、転入者によって町名が変更され、当時の面影を残す場所はこの墓地だけとなってしまいました。

全国各地へ離散した人々の望郷の想いに応えるべく、被爆30年を機にはじめて式典形式で大きな法要をおこなってから今年で40回目を迎えます。

被爆70年、当時を知る人も少なくなってきました。部落差別と原爆差別、二重の苦しみの中を生きてきた人々の心に寄り添うため、毎年200人を超える人たちがこの小さな墓地に足を運んでくれます。

10年ぶりとなる今年8日の夜の懇親会では、DVDが上映され、当時の様子や懐かしい人たちの笑顔を見ながら語り合う企画も計画。今年の法要は、消えた故郷と生き抜いてきた人々に思いをはせながら11時2分をむかえます。原爆犠牲者追悼法要は緑町墓地で10時半からおこなわれます。